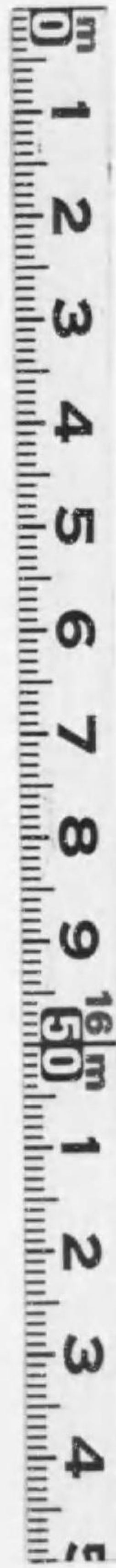


特116

701

高田江野
砂村口
高田江野
砂村口



始



43116
701





高砂 概説

内一卷ノ一

肥後の國阿蘇の宮の神主友成と云ふもの、都小上る序にとて高砂の浦に立ち寄り老人夫婦に會ふ。友成の尋ねにて老人は高砂の松を教へ、猶ほ古今集の序を引きて住の江の松と相生の名ある謂を説き、夫より古事を舉げて松が萬木に優れたる木なるを語り、遂に老人夫婦は高砂住の江の松の精氣と名乗りて舟に乗り住吉に去る。友成跡を追いて到れば住吉の神示現して舞樂を奏し、神人共に和合して君が代の千秋萬歳を祝ぐ。

凡ソ能ノ數ハ多ケレド廣ク人ニ知ラレタルハ高砂ナルベシ此能ハ祝言ノ心ヲ專一トシ流ニナク謡フヲ以テ旨トスヘキナリ
 小書 流シハ頭 大極 八段之舞

ワキ	阿蘇宮神主 友成	大臣烏帽子 白大口 紋附腰帶 扇	着附厚板 袷袴衣	季	前
ワキツレ	從者二人	大臣烏帽子 白大口 紋附腰帶 扇	着附厚板 赤袴袴衣	二	後
前シテ	尉	面小半尉 紋子腰帶 尉髮 着附小格子厚板 尉扇 水衣 竹把 白大口	曲柄 杖音吉順	月	砂高郡古如國豊播 吉住郡成西國津根
ツレ	姥	面姥 髮 無色唐織 無色髮帶 姥髮 着附摺箔 淺黃袴水衣 袴蒲黃 杉帶	能 脇 真 (物祗神)(目番初)	一	
後シテ	住吉明神	面那野男 白大口 紋附腰帶 透冠 黒垂 色鈴巻 着附厚板 袷袴袴衣 神扇	級		

高砂

世阿彌元清作

ワキ神主
眞次赤止
拍子ニ合
今とと始の袷衣
今とと始の袷衣目も
行く末ぞ久しき
早河シツカリ

九州肥後の國阿蘇の宮の神主友成
 成とは我が事なりわれ未だ都を見
 ずの程よこの度思ひ立ち都はく
 又よきの序なれ播州高砂の浦をも

高砂

見せらむとあじふ道行三人上ナリ 旅衣来遥ぐの
 教路と末遥ぐの都路と今日思ひ立つ
 浦の波松路長閑けき春風の幾日
 まぬらん跡来もいさうら雲の遥ぐと
 さも思ひ播磨傳さ砂の浦に
 急きてけりさ砂の浦に急きてけり
 高砂の松の春風吹きて尾上シテ對テ上柳テ開カニ
ツレ世ノ声
真ノ声
拍子ニ合ハズ

鐘も響音くななり 波の震の磯
 かくれ音こそ夕の備干あれシテ上開カニ
 浪をちもあふる人にせし高砂の松も
 昔の友あらずてさき身も世々は白
 雪の積り積りて老の鶴のねくら
 に残る方分の妻の糸夜の花きみ
 にも松風をのみ及聞き別れて心を友

と。菅造の思ひをのぶるばかりあり
 音信は松よ言問ふ浦凡の落葉夜
 の袖添へて木陰の塵を搔かると木
 陰の塵を搔かると木
 所は高砂の尾上の松も年古りて
 老の波もよりくさるや求の下陰の落
 葉かくなるまで命あがらへては
 葉かくなるまで命あがらへては

○小語

いつまでか生まの松それも久き
 名前かなそれも久き名前かな
 里人を相待つ所よ老人夫婦来れ
 り。いかよされなる老人よ尋ねま
 事の作 ことあたの事にて作か何
 事にてゆぞ 高砂の松と何れの
 木とやししゆぞ 只今う木陰と清めぬ

こころをあの松にていへ コキ 高砂住の
 江の松よ相生の名あり。高砂と住
 昔とは國を隔てたるに何ぞお生
 の松とは申しゆぞ シテ 仰の如く古今
 の房よ高砂住の江の松も相生の
 やうに光るとありさうなららこの
 射の津の國住昔の者ぞれなる姥こそ

當所の人あれ。老の事あらば申さ
 給へ 早カル上 サマ かきや見れぬ老人の夫婦
 一緒にありながらききま住の江高砂
 の浦山國を隔て住むといふの妙
 なる事やらん ツレ 引たての作や山川
 萬里を隔つれども互に通ふ心遣の
 妹脊の道は遠からず シテ 引まつ業ト

てもいふ所せよ。さう致仕の心。松の非
 情の物だにも相生の名のあるぞか。
 ましてや生ある人をして年久くも
 任者より通ひ別れたる尉と號は
 中明心 松徳共にこの年までお生の夫婦
 ことあるものを謂を聞け。面白や
 さうして前に聞えつる相生の松の

三行 抄テ

物語を前にいひ置く謂はなきか
 音の人のやうなつたはあてたき
 世のためなり。引致くらふは上代
 の方葉集の古の義。任者申すの
 今この書代に任及ゆき迄の御事
 松とはあまの言の葉の葉の古今
 相同しと書代とあがむる喩なり

早ササリ方ハよくよく聞キけバ方ハ難ヤや今イマこそ不フ審シ

春ハの日ヒのシテ光ヒ和ハらズ西シの海ノ

早ササリかハるハ位ノ江ノ引キのシテ夜ノ松ノもモ色シ

○小菟

保ホひシテ難ヤもモ長ナガ田タかハ上ウヘ海ノ波ノ

おハにテ國ノもモ治スるハ時ノ津ノ風ノ枝ノ

鳴ナさメ波ノ作ノあハれヤ逢ハひニ相ア生ハのシ

松ノこそモあハりケれハにヤあハみマきニ

てモこトもモ愚ホわカるハ代ノにハ住スるハ

民ノとシてハ豊ユキなるハ君ノのハ惠イぞモ有ア難ヤさニ

君ノのハ惠イぞモ有ア難ヤまシ。尚ナカ々ナさメのハ松ノ

のハあハりタきハ謂イまシくハ御ミ物ノ諸ノハハ

名ナ地チ上ウヘ引キれハ草ノ亦モ心ヲあハりト申マせズもモ花ノ実ノ

時ノとシ違ヒへズ陽ノ春ノのハ德ヲをモ具スへテ南ノ枝ノ

花ノ始メてハ開ク。あハれモもモこトのハ松ノはハ

○ササリ
切定書

その氣^キを^シま^シる^ルも^シあ^ハら^ハず^シて^ハ花^ハ葉^ハ時^ハ
 を^シ別^シか^スず^シ四^ノの^ト時^ハま^リり^テも^シ子^ノ年^ハ
 の^シ色^ハあ^リま^リう^チに^ハ深^クく^シ又^ハの^ト松^ノ花^ノの^シ色^ハ
 十^ノ廻^ノも^シも^シ入^リか^ルる^タよ^リを^シ松^ノカ^バ
 枝^ノの^シ言^ハつ^テ葉^ノ葉^ノの^シ露^ノの^シ玉^ハを^シ磨^ク
 種^トあ^リて^ハ生^キま^シて^ハ生^キけ^ルもの^ト
 ぐ^シに^ハ敷^石の^シか^げに^ハよ^リよ^リか^わか^わ
 赤切

クセトサラシ
柏子ニ合

あ^リま^リに^ハ長^ク能^クか^キ感^スも^シ方^ハ情^ハ非^シ情^ハの^シ
 その^シ聲^ハ又^ハな^リ致^スに^ハ漏^ルる^ル事^ハな^シ。
 葉^ノ亦^ハ去^リ砂^ハ風^ノ聲^ハ水^ノ音^ハま^で萬^ノ物^ノ
 こ^もる^心あ^り。ま^まの^シ林^ノの^シ東^ノ風^ハよ^リ動^キ
 秋^ノの^シ虫^ノの^シ北^ノの^シ鳥^ハに^ハ鳴^クも^シ皆^ハ和^シ致^スの^シ
 姿^ハな^らず^シや^ハ中^ノに^ハも^シこの^シ松^ハは^ハ萬^ノ木^ノに^ハ
 勝^レて^ハ十^ノ八^ノ公^ノの^シよ^リそ^ハほ^ひひ^ノ秋^ノの^シ緑^ハを^シ

有りて古今の色と見す、中 始皇の御
 爵に與つ、中 獲の亦なりとて異國も
 本朝も中 万民これと賞翫す、ヤ
シテ上 高砂の尾上の鐘の音すなり、元へ戻シ
 かけて霜は直けども、松が枝の葉
 色は因り深緑立ち、中 霧の朝夕に
 搔けども、カ 落たらぬ、カ 葉のあまきせぬは、カ 眞

なり、松の葉の敷り失せずして色は
 あまきせぬ、カ まさきのかづらな、カ かまの
 だもへありける、上 常盤木の中にも名
 高砂の葉代のため、カ にも相生の
 松ぞめでたま、カ げに名を得たる
 松が枝のげに名を得たる、カ 松が枝の
 老木の音あらはして、カ 其の音を名

昔り孫へや ツテ上シツカリ 今は何をかつむるま
 られはさる砂住の江の相生の松の精
 夫婦と現 ゲンゴト 来りたり サキ さま 地土サラリ さま
 名前の松の亭持と頭して ツテ入シツカリ 草末
 心あけれども 地土サラリ 畏ま付そ ツテ入シツカリ 出も
 本も 同サラリ 神 カミ 大君の國あれ ツテ入シツカリ づまで
 も君が付に ツテ入シツカリ 住吉にまづ行きてあれ

早事三人
 待謀
 ○難子と美子と
 打切ヤ

みて侍ち申さ 元ニニ ころ ハ 彼 元ニ の行 ハ あり 甲 雲の
 小 元ニ 舟 ハ うち ハ 乗 ハ りて 中 遠 ハ 風 ハ に サ ま ハ かせ ハ つ 中 仲の
 方 ハ に ハ 出 ハ て ハ け ハ け ハ り ハ や ハ 仲 ハ の ハ 方 ハ 出 ハ て ハ け ハ け ハ り 中 間
 高砂 ハ や ハ こ ハ の ハ 浦 ハ 舟 ハ に ハ 帆 ハ と ハ あ ハ げ ハ て ハ う ハ の ハ の
 浦 ハ 舟 ハ に ハ 帆 ハ と ハ あ ハ げ ハ て ハ 月 ハ 諸 ハ 君 ハ ま ハ 出 ハ て ハ 汐
 の ハ 波 ハ の ハ 浪 ハ 路 ハ の ハ 鳴 ハ 陸 ハ や ハ き ハ く ハ 鳴 ハ 尾 ハ の
 仲 ハ さ ハ ん ハ て ハ ま ハ や ハ 住 ハ の ハ 江 ハ 小 ハ さ ハ ま ハ け ハ け ハ り

はや佳の江よまきまにけり

後シテ上サアリ
佳吉明神
出端
拍子合六

われ見ても久しくなりぬ佳吉の岸

の姫松幾世経ぬらし睦まじと君は

知らずや瑞籬の久しき代々の神

かぐら夜の故の拍子と揃へてすじ

め鈴へ宮つこたち 西の海憶か原

の波間より 現れ出でし神松の

まなれや。鼓んのまきの清香流

玉藻のなる岸陰の 松根に倚

つて腰を摩れは 弘羊の緑手に

満より 梅花を折つて頭に挿せ

二月の空に夜に落つ 有菘の

影向や有菘の影向や月佳吉の

神遊序歌を拜むあらたきよ

○獨吟
○仕舞

シテ上^{抑ヘテ}

げにさまじまの華^{ハナ}の聲^{コエ}も澄^スむ
 なり^ハ位^イの江^エの松^{マツ}影^{カゲ}も映^ハる^ルあ^ハる^ル青^{アヲ}
 海^{ウミ}波^{ナミ}とは^ハら^レや^ラん^ト 神^{カミ}と^ト君^{キミ}との
 道^{ミチ}す^スぐ^クに^ニお^ホの^ノ妻^メに^ニ行^クく^ハの^ハ
 引^ヒれ^レぞ^ゾ遠^{トホ}城^{シロ}樂^{ガク}の^ノ舞^{マユ} 亦^モて^テ方^{ハタ}歸^{カエ}の^ノ
 小^コ忌^{イミ}衣^イ 日^ヒ子^コ腕^{ウデ}み^ミは^ハ悪^{アク}魔^マを^ヲ拂^{ハラ}
 ひ^ヒと^トさ^サむ^ムる^ル手^テに^ニの^ノ壽^ス福^{フク}を^ヲ抱^エま^マる^ル秋^{アキ}

○祝言小謡

樂^{ガク}は^ハ民^{タチ}を^ヲ撫^ナで^テ萬^{マン}歳^{サイ}樂^{ガク}に^ニの^ノ命^{イノチ}と
 延^{ノボ}ぶ^ブ。相^{アイ}生^ニの^ノ松^{マツ}凡^{ソドモ}紙^シの^ノ聲^{コエ}ぞ^ゾ樂^{ガク}む^ム
 紙^シの^ノ聲^{コエ}ぞ^ゾ樂^{ガク}む^ム。

田村 概説

内一卷ノ二

東國の僧都、清水寺にて花守の童子より同寺の來歴を聽き、共に彌生三月
天も花に酔へる佳景を賞つ。僧童子の尋常人ならぬを知り、其の名を問へば
答へずして田村堂の内陣に失す。既にして夜も更けし頃、甲冑を帯した
る武將現はれ、坂上田村麿なりと云いて、鈴鹿山の悪魔追討を語り、戦いの
様と學びて止みけり。

此曲前半ハオホムネ朗カニ謡ヒ後半ハ確リト謡フベシ
 小書 長胡床 替装束

役別	ワキ 旅僧	ワキ 天從僧	前シテ 花守童子	後シテ 坂上田村麿
装束	角帽子 着附無地鬘斗目 水衣 綴子腰帶 扇 <small>珠敷持 又ハ大口僧ニモ</small>	角帽子 着附無地鬘斗目 水衣 綴子腰帶 扇 <small>珠敷持 又大口僧ニモ</small>	面敷童(童子ニモ) 黒頭 黒地鉢巻 着附菱竹拍 水衣 <small>綾入腰帶 襟浅黄赤ノ類 童扇指ス 杖篋持</small>	面平太(合若ニモ) 黒垂 梨打烏帽子 白鉢巻 着附厚板 <small>唐綾 半切 法被 縫紋腰帶 襟浅黄緑色ノ類 太刀 修羅扇持</small>
季	三	月	二	日
所	京	東	洛	水
曲柄	替古順	五	級	(羅修勝)

田村

世阿彌元清作

ワキ僧
 次オ上
 ヨウク
 合
 鄙の藝路隔て来て鄙の藝路
 隔て来て九重の雲に急がし
 引は東國方より出でたる僧にてい
 われまだ都をカクす作程にての雲
 思ひまきちて作道行三人上演もちや縁生
 半の春の空カク縁生半の雲の空カク歌も

長閑に廻る日の霞むき方や音羽山
 龍の響音も静なる清水寺に暮ま
 こけり清水寺に暮まこけり
 仰強にこれの都清水寺とちややす
 げにゆされなる梅の盛とをえてい
 人を待ちて妻しく暮ねるやと思ひ
 社のつからまの手向となりけり。

シテ童子上明カニ
 一声
 ツヨク
 拍子合ス

地主権現の花盛 花の名可
 多しとらんども大悲の光色そま
 故かこの寺の地主の櫻に志くはあ
 されぶみや大悲大悲の妻の花十悪の
 里に芳しく三十三子の秋の月五傷
 の水も教清一 早振神の心慮の
 空あれや 白妙も雲も霞も埋れて。

雲も霞も埋れて。仰れ桜の梢ぞと。
見渡せば八重一重に九重の春の空。
四方の山な友ねのづから。時ぞと見ゆ。
る。景色かな。時ぞと見ゆる景色かな。

身コ中ナカにニこれコトなるナリ人ヒトおオ事コトねネすスまマ事コト
のノ此コノ方カタのノ事コトにてニ何ナニ事コトにてニ何ナニぞ
身ミ中ナカにニ美ミきキ玉タマ帯オビとト持モちチ木キ蔭カゲとト

清め給ひゆはも一花守にて御令り
ゆかシテ明アカカニ
申す者なり。つも花の頃は木蔭
と清め作程に花守とやまさん。又
言コトつツこコもモやヤ中ナカへヘまマ何ナニれレゆユあるアル者モノと
はハ察サツしシ入イらラびビおオ由ユありアリげゲにニ見え
てテまマまマつツ雷ライ寺ジのノ法ホウ来ライ應オウ妻メとト

流れたる清水の深き誓をも救ふて
 子手の清手のとりどり様どの誓を普
 して國土萬民を偏さすの大悲の
 歎ぞ方救まじげにや安樂坐果より
 今この安樂に示現して我等が為
 の觀世音仰ぐも愚なるべしや仰ぐ
 も愚なるべしや。 此の面白きお

まりの逢ひていふものかなよ見え渡り
 たるは皆ち前にてそいらん御教への入
 シテ前ヲ受
 かしんは皆ち前にてい御尋ねりて入
 ナーのべー 其の南に當つて塔婆
 の見ええていふめりなる前みえていそ
 シテ朗カニ
 あれてそ教の中山清閑寺今能登
 まで見えそいへ 其また北に當つて

入相のぼるえいはいかある御寺にて
 作ぞ シテ朗カニ かれは上見ぬ鷲の尾の寺。
 や 心持シ 水鏡の音羽の山の巖よりも。
 出でたる月の輝きてこの地まの
 桜に映る景色をしまつまづこれこそは後
 と 事 あれ 目カレ上 げにげふこれこそ
 惜しけれ異ひなまきまの一時

○曲述獨吟

惜むべし 惜むべし 惜むべし
 一刺價の金花に清音の月み教
 げに千金も替へど 中 今この
 時かや 目下 ありあら面白の地まの花の
 景色や 甲 桜の木の向み伸る月の
 香も降る 乙 虎尻の鏡花うつれて
 散るや 中 心なるらん 乙 花ぞな名に

○は舞

負^ハき^中た^イの^ラ都^中の^イ春^トの^イま^トげ^ハみ^ハ時^中め^ハける
 粧^{ヨク}青^ハ陽^ハの^ハ陰^ハ緑^ハに^テて^ハ凡^ハ長^ハ閑^ハなる
 音^ハ羽^ハの^ハ能^ハの^ハ白^ハ糸^ハの^ハ繰^ハり^ハを^ハ返^ハす
 ても^ハ面^ハ白^ハや^ハ有^ハ難^ハや^ハお^ハ地^ハ主^ハ控^ハ現^ハの
 花^ハの^ハき^ハも^ハ異^ハなり^ハり^ハ頼^ハめ^ハ標^ハ茅^ハ
 か^ハ慮^ハの^ハさ^ハも^ハ茶^ハわ^ハれ^ハ女^ハの^ハ中^ハに^ハあ^ハら^ハん
 限^ハりの^ハお^ハ誓^ハ言^ハ預^ハ偶^ハら^ハも^ハもの^ハを^ハ清^ハ水^ハの^ハ

○ 獨吟

緑^ハも^ハさ^ハす^ハや^ハ青^ハ柳^ハの^ハけ^ハも^ハ指^ハれた^ハる
 亦^ハなり^ハも^ハ花^ハ梅^ハ木^ハの^ハ粧^ハり^ハづ^ハる
 春^ハも^ハお^ハり^ハな^ハ入^ハて^ハ長^ハ閑^ハけ^ハき^ハ敷^ハは^ハあり
 春^ハの^ハ天^ハも^ハ花^ハに^ハ酔^ハへ^ハり^ハや^ハ面^ハ白^ハの^ハ
 春^ハべ^ハや^ハあ^ハら^ハ面^ハ白^ハの^ハ春^ハべ^ハや^ハけ^ハに^ハや
 け^ハし^ハま^ハい^ハさ^ハら^ハら^ハに^ハた^ハら^ハ人^ハなら^ハぬ
 粧^ハの^ハそ^ハの^ハま^ハい^ハか^ハあ^ハら^ハ人^ハや^ハら^ハん

^{シテ上} 朗カニ
 妙^{カニ}なるもいふやその名も白雪の
 跡^{アト}を惜^シまへこの寺^イみ帰^ル方^ハと申^フ
 せよ^{地上} 躑^ツもらつくありかまの向^カ道^{ミチ}
 き^ミ狂^キかき^キ道^{ミチ}の^{シテ} 朗カニ
 中^{ナカ}に^前受^{ウケ}も^ハぼつ^ツかな^クも^ハ思^フひ^ハ給^フわ^ハ神^{カミ}が
 行^{ユク}く^方と^カん^ヤよ^クも^ハと^シて^上 地^チ主^ヌ権^{ケン}現^{ゲン}の^御
 前^{マエ}より^下らる^カと^見え^スか^ハ下^リり^ハは

上待天

せそ^イ坂^ノの^上の^田村^ノ堂^ノの^軒伸^ノる^や月^ノ
 の^起ら^戸を^押し^開けて^内に入^らせ^給
 ひ^けり^内陣^ノお^入ら^せ給^ひけ^りの中^ノ入^間
 夜^ノも^すか^ら敷^るや^梅の^陰お^居て^打
 敷^るや^梅の^陰に^居て^花も^妙なる
 法^ノの^場迷^はぬ^月の^光と^をん^この
 御^ミ經^ノと^讀誦^スする^この^御經^ノと^讀誦^スする

後シテ上寛タリ
田村唐
一声ツヨク
拍子合ス

判ら有難の御経やお清水寺の
龍津浪まこと一河の流を汲んで
他生の縁ある旅人よまじ業と交す
夜聲の讀誦され即ち大慈大
悲の觀音擁護の結縁たり
かまやな衆の老にかまきて
男體の人の息えはみは妙なる

田村

○サヨ獨吟
○切近難子

サシ地上
気ラカハ

人おてましますぞ
むべき人皇五十代平城天皇の法宮
にあり坂の上の田村唐 東夷を
平げ悪魔を鎮め天下泰平の忠勤
たりも即ち當寺の佛力なり
然るに君の宣旨には務別鈴鹿の
悪魔を鎮め都安全になすべし

田村

九

この作によつて軍兵と調トク既スも教ク
 時節トキにまゝりてこの觀音の佛ブツ前マエに
 あり祈イノ念ネンをいたし立タ致チせしに
 かしきの瑞スズ蔭カゲあらたなれば歡ウレシ喜シ傲トク
 候マタの頼タノを會アひんで急イサぎ凶ヨク徒トみ打ウつ
 立ちけりウチ普フ天テンの下ノ率ソツ出デの内ノ内ノ
 りと主ヌシ地チにあらざるやヤ頃キリて名ナにシ

○申ウチは後ノチ中ノチ
○難ナシ子コをシモ

負オみ陣アの戸カドまで逢ア坂カの山ヤマを越コえられ
 浦ウラ波ハの粟アヲ津ツの森モリやかげろみ
 石イシ山ヤマ寺テを伏フし拜イハみされも清ス水ミヅの
 一ヒト佛ブツと頼タノはあひに近チカ江エ路ジや務ム田タ
 の長ナガ橋ハシ踏フミみ鳴ナり物モノも足タまなまや勇ユウ
 むらんウシシ上ノ既スに伊イ勢セ路ジの山ヤマ近チカく馬ウマの
 道ミチもさきかげんとナあつツき見ミせたる

梅が枝の花も、お祭もさしめきて。
 猛き心はあらがねの土も、お方も我が
 大君の御國に、固より観音の御誓
 佛がとらひ、御方にもなほお救はまはす
 らもが待つとは知らず、お男鹿の鈴鹿
 の袂せし世もまでも、思入の喜例なる
 べし。○
地上カウツテ ねた山河と動す鬼神の

古ニ 萬木十山

○獨吟 ○任舞

聲。天に御音き、地み満ちて、萬丈青
 山動揺せり。いかに鬼神も慥かに
 圓け音もさる例あり。千方といひ
 遠原にはへし、鬼も玉意と宵く天
 野にて。お方を捨つれば、忽ち七ひ失
 せしぞかし。ましてや、向迎き鈴鹿山
 かりさけ見れば、伊勢の海ありさけ

○は舞ヨリモ

地上

拍子三合

日本
三
還^{ダマ}る^ル松^{マツ}竹^{タケ}の^ノ敵^{トク}は^ハ七^{ナナ}び^ヒあ^ハけ^リり^とい^ふ。
觀^{カン}音^{オン}の^ノ佛^{ブツ}が^ハな^り。
中^{ナカ}七^{ナナ}ラ

江口 概説

内一卷ノ三

旅僧江口の里に到りに女性現はれ西行法師は「宿を惜む」と詠れりも理無く惜みに非ざる旨と語り姿を消しぬ。稍ありて江口の君の靈舟に乗りて來り歌を唄ひ舞を舞ひ歸る姿は普賢菩薩と化し白雲に乗じて西の空に向へり。

だ夜深きよ旅立ちて。またあ深
 きよ旅立ちて。後の川舟行くまの
 鴉殿の芦のほの息え。松の煙
 の波寄する。江口の里に暮まに
 けり。江口の里に暮まにけり。
 えては。はなれなる。は江口の君の舊跡
 かや。痛は。しや。その。も。は。出。中。に。埋。

シロ

羅サ上
 神合文

むとら。ん。ご。も。名。は。苗。ま。り。て。今。迄。も
 昔語の舊跡と。今見らる。事の。哀。さ。ま。

内先ラカハ

げにや西行法師この處まで。あ。の。宿
 を。借。り。け。ら。な。ま。の。心。み。か。り。り。か。づ。母。の
 中を厭ま。ま。で。こ。そ。か。た。か。ら。あ。假。の。宿
 り。を。借。む。お。か。な。ま。詠。け。ん。も。こ。の。處
 いての事なるべ。あ。ら。痛。は。し。や。

エロ

二

シテ女メの困クワカハハト

なすありあれなる御僧ミソウへの歌

をば何ナニと思オモひよりして口クチすきむ給タマひ

ゆぞ不思議フシギかな人家イナも又マタえぬ方カタ

よりも女性メヨメ一人イチニンありつゝ。今の詠歌エイカ

のうちはずしむとさくらむと向ムカひ給タマふ

仕事シゴトども行イたふ事コトねむらむぞ

忘れて幸サイと強ツヨクもものさより思オモひまむ

カニ上カニノカミ

言コトの葉ハのまのあげ髪カミの露ツルシの世ヨを。

厭イヤみまてこそかたから假カゲの宿ヤドりを

惜オモむとのそのさの葉ハも恥ハか

ければさのみは惜オモみまらせむり。

その理コトともやさんためはこれ迄ココ

現アツクれ出デでたるなり。心得ココロす假カゲの

宿ヤドりも惜オモむ君キミかなと西行サイキョウ法師ホフシが

エウ

エ

詠せり詠とた行となく用よ可に
 さのみは惜まじうにしとさわり
 御牙はさ^{カニ上}つかなる人にてま
 ますぞ^{シテ内湖カニ}もさればこそ惜まぬ
 よりの御を事と申し教とへ行^{ナニ}
 ても詠もせさせははらん
 げにそのを教のさのさのさ^{オロ}と殿よ^{ナニ}

シテ中入

人^{シテ中入}も^{シテ中入}圓^{シテ中入}げは^{シテ中入}假^{シテ中入}の^{シテ中入}宿^{シテ中入}に^{シテ中入}ひ^{シテ中入}ら^{シテ中入}む^{シテ中入}な^{シテ中入}と
 思^{シテ中入}ひ^{シテ中入}ば^{シテ中入}か^{シテ中入}り^{シテ中入}ぞ^{シテ中入}ひ^{シテ中入}と^{シテ中入}む^{シテ中入}あ^{シテ中入}と^{シテ中入}捨^{シテ中入}人^{シテ中入}と^{シテ中入}詩^{シテ中入}の
 中^{シテ中入}せば^{シテ中入}女^{シテ中入}の^{シテ中入}宿^{シテ中入}り^{シテ中入}に^{シテ中入}と^{シテ中入}あ^{シテ中入}ま^{シテ中入}ら^{シテ中入}せ^{シテ中入}ぬ^{シテ中入}も
 理^{シテ中入}なら^{シテ中入}ず^{シテ中入}や^{シテ中入}げ^{シテ中入}に^{シテ中入}理^{シテ中入}あり^{シテ中入}西^{シテ中入}行^{シテ中入}も
 假^{シテ中入}の^{シテ中入}宿^{シテ中入}り^{シテ中入}を^{シテ中入}捨^{シテ中入}人^{シテ中入}と^{シテ中入}ら^{シテ中入}ひ^{シテ中入}此^{シテ中入}方^{シテ中入}
 も^{シテ中入}名^{シテ中入}に^{シテ中入}負^{シテ中入}ふ^{シテ中入}色^{シテ中入}好^{シテ中入}の^{シテ中入}家^{シテ中入}に^{シテ中入}は^{シテ中入}き^{シテ中入}も
 理^{シテ中入}れ^{シテ中入}來^{シテ中入}の^{シテ中入}人^{シテ中入}知^{シテ中入}れ^{シテ中入}ぬ^{シテ中入}事^{シテ中入}の^{シテ中入}及^{シテ中入}多^{シテ中入}き^{シテ中入}宿^{シテ中入}に

惜むとあはれ縁と縁めは シテ 捨人と思ふ
 心なふと ワキ 惜むとの シテ 言の成は
 惜むこそ シテ 惜まぬ シテ 彼の宿なる シテ 惜まぬ
 假の宿あると シテ 惜むと シテ 彼の宿の
 返らぬ シテ 古の シテ 今も シテ 惜人の世語に
 心も シテ 留め シテ 多し シテ 惜 シテ げに シテ かう シテ 世の
 物語 シテ 受け シテ ば シテ 姿 シテ も シテ た シテ そ シテ かれ シテ に シテ かけ

○福吟

○小註
上あり
伸シテ

ろ シテ め シテ 人 シテ は シテ い シテ か シテ な シテ ら シテ ん
 た シテ ず シテ ず シテ 暮 シテ は シテ ほ シテ の シテ ぼ シテ の シテ と シテ 見 シテ え シテ 隠 シテ れ
 あ シテ る シテ 川 シテ 隈 シテ に シテ は シテ 口 シテ の シテ 傍 シテ の シテ 君 シテ を シテ 見 シテ え シテ ん
 恥 シテ 加 シテ へ シテ ち シテ 上 シテ へ シテ 疑 シテ 荒 シテ 磯 シテ の シテ 彼 シテ と
 消 シテ え シテ たり シテ 跡 シテ な シテ れ シテ ち シテ 假 シテ に シテ 住 シテ み シテ こ シテ へ
 種 シテ が シテ 宿 シテ の シテ 梅 シテ の シテ 立ち シテ 枝 シテ や シテ かん シテ え シテ つ シテ ら シテ ん
 思 シテ ひ シテ の シテ 形 シテ に シテ 君 シテ が シテ 来 シテ ま シテ せ シテ る シテ や シテ 一 シテ 樹 シテ の

エロ

五

陰にや宿りけし又一行の流の水
 汲みても志ろめされよわ江口の
 君の出るぞと聲ばかりして失せ
 けり聲ばかりして失せなげり
 ○中入間

ワヤ河

此ては江口の君の出る候に現れ
 われにや城と交しけりぞやいざ
 舟して浮くこといひもあへねば
 待議
 上三入
 中ニ
 舟カニ

かきざやあしひもあへねば
 やお月津又渡る川水に越女の謠
 み舟舟月に見えたる不思後さよ
 月み見えたる不思後さよ

上三入
一声
獨吟

逢ふ瀬の波枕うき舟の夢も見えたら
 はしの寝かぬ方のはかなさよ佐用

シロ
姫カ松浦シロ浮行敷く油の海ゴイナの唐土モロコシ船シブ
の名跡ありまた宇治の橋ハシ姫も訪ウラハ
んともせぬ人を保つも方の上と衣アハレ
あやうウラせぬや吉野ヨシノのよや吉野ヨシノの花も
さも雲も波もあはれ世中国に逢はばわ
かきもな月月澄み渡る水水の面面に
遊遊女女のあまた歌歌以以證證ふしめとあへる

後ニテ方ルル朝カニ
人影人影のそも誰人のあやらん
なかにこのあを誰か舟舟とは死死か
ながら古古の江江の流流の遺遺遠遠の
月のあやせとば後後せよ前もわ江江
の遊遊女女とはそれほきりた古の
いミテわカ古古こははイニあハ月月の首首にカあアら
あツレわハ神神等等もかカあアらラに見え見あアらラせセど

植ゑす 或の三途ハ雅の悪報に
 墮して患ふこゝ入られて既に誓心の
 なかだちを失ふ 或るに我等たま
 たま受け難き人引せを受けたりを
 りども罪業深き身と生れ殊に
 例少き河竹の流の女となるさまの
 世の報まで思ひやこそ悲しけれ

○は舞
 名
 拾遺合

紅花の春の朝紅錦繡の山粧を
 と見えしも夕の凡にさそはれ
 紅葉の秋の夕黄顔顔の林色を
 かくむとらへも朝の雲みろふ
 松月薄月合に詠とかはす賓客も
 去つて訪ふ事なり翠帳紅圍に
 粧をならべし妹容もいつのまにかは

勝つらん。たよそびなきまよ木情ある
人倫らづれ。義と道るまかくは思ひ
かりながら。或時は色に染み貪
悪の思ひ体からず。又或時は聲を
聞き愛執の心と深き心に思ひ
口にそよま舌の縁とあつものを
げにや皆人の六塵の境に迷ひ六根の

○住舞
罪とづらる事も。見ること聞く事に
迷ふ心なるべし。面白や。序之舞
空相無漏の大海に。五塵六欲の風は
吹かねども。随縁まの皮のたぬ
日もなしたぬ日もなし。彼の
なちるも何故ぞ。候なる宿み。たあま
ゆゑ心とあひあうま。あら

シテト 人をも慕はト

地上 待つるもなほ

シテ ぬれ踏も嵐か

地上 花は紅茶よ

月堂のあつてもあらずな

シテト 柳手各

思へば儂の宿思へばかりの宿

心もむなしく人をだにいさめわれ

なりこれまでもなりや歸るまで

普賢菩薩と現れ私は白雲とあり

つ。老こそもに白妙の白雲はうも

奪りて西の空に行き終ふ者難くぞ

免ゆる有難くこそや免ぬれ

吉田の少將美濃國野上の里にて花子といへる女と契を籠めけるが秋子は
 歸り来んとて旅立ちしを花子待侘びて形見の扇を持ち後を尋ねて都
 に上りよくなき人に馴衣のと物狂はしくそて此處と歩きけり都の人之
 を漢の故事になぞらへ班女と呼びならはしけるが少將程なく旅より歸り
 来り糺の森にて廻ぐり合ひ互に形見に取りかはせし扇をとりしに目出
 度く思ひを遂げりとなり。

班女 概説

内一卷ノ四

吉田の少將美濃國野上の里にて花子といへる女と契を籠めけるが秋子は
 歸り来んとて旅立ちしを花子待侘びて形見の扇を持ち後を尋ねて都
 に上りよくなき人に馴衣のと物狂はしくそて此處と歩きけり都の人之
 を漢の故事になぞらへ班女と呼びならはしけるが少將程なく旅より歸り
 来り糺の森にて廻ぐり合ひ互に形見に取りかはせし扇をとりしに目出
 度く思ひを遂げりとなり。

此ノ曲前ハ閑カニ後ハ狂ナレバ調子張リメニ謡フベシ
小書 笹の傳

俳優	野上宿長	トモ從者	ワキ吉田少將	後シテ花子	前シテ花子	役別	装束	附	季	所
		着附無地鬘斗目	風折烏帽子 紋附腰帶	唐織右ノ肩脱ギ前同断	面若女 襟白		髪 妻紅扇持	髪帶 着附摺箔	唐織着流	
		素袍上下	着附色厚板 妻紅扇							
		小刀	白大口							
		扇	長絹又ハ狩衣							
目番	四	曲柄	七	月	季					
	(物女狂)(モ目番三男)	替古順	宿上野野破不困濃美前 改賀下北洛都京後							
級	二									

班女

世阿彌元清作

狂言
かやうに作者は美濃の國野上の
宿の長にてゐる。さてもあれ花子
とやす女ともちてゆが。さきこ
美の頃都より。吉田の某殿と
やらんやす人の東へりり給ひゆが。
汝の宿に泊り給ひて彼の花子と

早吉田將明カニ
ツヨク
ツヨク

蹴らう名跡富士の嶺の歸るぞ名跡
富士の嶺のゆきて都に詣らん

ワキ内 用カニ

これは吉田の少將と我が事なり。
さてもわれ過ぎぬ一喜の頃東小
下りのはや秋にもなりいへば。只今
都により作道行天上下リ都をば震とたに
立ち出でて震とたに立ち出でて

暫し移る秋風の粒と白河の
閑路より又立ち帰る袂衣浦山
を過ぎて美濃の國野上の里に急ぎた
けり蹄上の里に急ぎたけり

ワキ内 美ヲカハ

妙手に娘がある。急ぐ向これはや
美濃の國野上の宿にてこの處に
花子といひて女に契りし事あり。

まだこの愛にあふが尋ねて来りふへ
長つてゆ。花子の事と尋ねやして
又の長と不和なる事のひびて今は
この愛に御今のなき由かし候
コキ明カニ 是くは定めなき事あからもその
花子歸り来り事あらば却入席の
時はヤ〜とせんと候し付け候。

急ぐ向預なく都に急ぎてゆ。われ
宿願の子細あればそれより直に乱へ
来らうずるはては皆さまりゆへ
春日野の香向をひけて生ひ出で
くる草のつつかた見え〜悉かも
よ〜なきの人に別れ後の日と重ね月
行けども安を秋風の便あらで候。

後シテ全 伸ビリ
一声 ヨワク
袖子合ハ

河まカハ

狂歌

七

叶かりをしらす人もなす夕暮の
 雲の嶺平に物と思ひうらむるをにあく
 かれ出でて身をを後らにあす事を
 非や佛も憐みて思ふ事をかなへ
 給くそれは是柄箱根玉津嶋貴船や
 三輪の岨神の夫婦男女のわたらひを
 身らんと誓ひてはりますす此の非どに

祈誓せばなどか強のなかるべき
 謹上再拜徳すてみ神がなほまだ
 きまらぬけり人知らずこそ思ひ
 うめしか翔 判ら痕めしの人をうや
 げにや弥うつ序手洗川に徳せしと
 涙かまひけしをそわぶれん人び
 誠少なき涙江の流まで頼まば

我々も受け継ぐはぬの程や。も
かくも人知れぬ思ひの露の
可らづくならま。身の方
心だに。祇の道にかなひなば。祇の
道にかなひなば。新らすとても。
我や身らし。神等まで。美女の月
は曇ら。を。新らすで。我へ。人心

○小話
上三の明かた

衣の玉は有りながら。根ありやと
もすれば。なほ同。よと。新らなり
なほ同。よと。新らなり。かた。我女。
何とて。今白は。狂ぬ。面。白う。狂ひ入
引たて。や。な。あ。れ。出。後。せ。今。迄。は。
揺かぬ。指。と。見。え。つ。れ。も。何。の。誘。へ。ば
一。些。も。新。ら。あ。り。た。ま。た。ま。心。す。く。な。る。と。

シテ 朝カキサリ

狂へと俤せある人ごころ内狂じたる
 秋の葉の心もまた乱れ意のあら
 半や狂へしな俤せありさむらひうよ
 引て例の班女の扇のふ シテカシテ 引うなわ
 神が名を班女し呼び狂うやよし 美ラカハ
 よしそれも憂き人の形見の扇手に
 かれてうちたき籠き袖の露あす事

まても思ひぞう出づる班女が園の内は
 秋の扇の色。楚王の臺の上はあ
 琴の聲 カチン 夏りる扇と秋の白
 霧と行れか先におきまの床す
 さまじや獨寝のまひーま オクコト
 園の月と眺めし ウツラ 月重山に隠れ
 ぬれぬ扇とあげてこれと喻へ

○サニ曲獨吟
○舞妓送摩子

シテ朝朝三三点点 抱抱琴琴上上に教教りぬぬれは雪雪と聚聚めて
 春春と惜惜む 夕夕の霞霞朝朝の雲雲行行れ
 魚魚ひのつまつあらぬぬささひひりりまま夜夜半半の
 鐘鐘の音音鶏鶏籠籠の山山に響響音音きつつ明明け
 ななんんととしてああとと催催しし 舟舟ああてて圍圍
 傳傳る月月だだもも暫暫しし枕枕にに跡跡ららずずして
 又又獨獨寢寢ににななりりぬぬるるぞぞやや翠翠帳帳

○仕舞

紅紅圍圍にに枕枕並並ささるる床床の上上にに列列れれ衾衾の
 夜夜すすががららもも同同穴穴のの跡跡ももああららずず
 それそれもも同同女女のの命命ののみみととささららずず
 いいつつままでで草草のの露露のの向向もも比比翼翼連連理理の
 かかたたららひひそそのの磯磯山山宮宮のの私私語語もも誰誰か
 中中元元へへ入入りりてて今今のの世世ままでで漏漏すすららん
 だだららなないいててもも種種かかままのの秋秋よよりり前前にに

かあらずとけふへの救の重なる
あだ一言城の人心頼めて来ぬ
積れども櫓干に立ちつうそ
たのむよと眺むれば夕言の秋風
嵐山原野家もあの松とこころ
音づつれ我が待つ人よりの音信と
いつかまゝいせめてもの形見の

扇手にあれて風のたよりと思へども
夏もたやすきの窓の秋風冷か
吹き流ちて圍む扇も雪なれぬ
名をひらくもすきまに秋風根
ありやよしと思へばこれもげに逢ふ
別なるべし其の報なれば今さら
母も人も恨むまじき思はれぬ

○佳舞
○獨吟

夕の程を思ひ續けて獨り居る。
班女が圍うさまひきま。繪みかける。
月を隠して懐に持ちたるあまき。
夕の神も三重がさね。その色衣の
つまのかねごと。木ならずとゆみ。
暮の月日も重なり。秋風は
吹けども萩の葉のいろよもの便も。

夕かで鹿の音虫の音もあられかれ。
の契あらしや。形見の扇より。
形見の扇よりなほ裏表あるもの。
人心なりけり。や。扇とはを言
や。逢はで。さ。逢は。逢みもの。逢は
で。さ。逢は。逢みもの。逢は。逢
ある。あの班女が持ちたる扇見たまき。

よんや〜る入ヨシらかたねむあのは輿ウツの
 内ウチより。ねむの持モちたる扇アビは傷キズらど
 たまの馬ウマ車クルマにてるまあらせられ人
 シテ明カニ
 引ヒれは人の形カタ見ミなれば。うとと離ハさを
 持モちたる扇アビなれども形カタこそ今イマは
 他タなれらねなくは。忘ワるる際サカイもあら
 まじものさし思オモ入イらもさすかカス。

○獨吟

添ソみ心ココロ地チす。さりさりは。扇アビ取トルる
 向ムカも惜オソし。まものさし人ヒトにト入イらす事コト
 あらどオちなチなたナはも忘ワれ形カタ見ミの
 言コトの森キナと銀ギン手テの森キナの下シタ躑シ躑シをシに
 出デでスはハそれサらもモ入イらトてトそソ知チらアあ
 シの扇アビ引ヒてテはハさシてテ何ナニのタあアぞゾと
 叶ハ言コトの月ツキと出デせる扇アビの繪エのカく

ばかりハカりリ 何ナニもモ よヨしシ やヤ 白露ハクのノ 草クサの
甲 何ナニもモ よヨしシ やヤ 白露ハクのノ 草クサの
 野ノ上ノのノ 長ナガ寝ネせセ 契ケのノ 秋アキはハめメす
シテ 野ノ上ノはハ 野ノ上ノはハ 東トウ路ロ
 のノ 末マのノ 松マツ山ヤマ 彼カ 秋アキ へヘ 歸キらラ 子コりリ 人ヒト
前ヲ受テ下サラシ 野ノ上ノはハ 野ノ上ノはハ 東トウ路ロ
 やヤ らラ しシ 末マのノ 松マツ山ヤマ 立タつツ 彼カのノ 行ユキが
 恨ウラみミ しシ 契ケのノ 墨スミ くク 秋アキ 見ミのノ 扇アヒ そソ

なナ たタ あア もモ 身ミにニ 添ソへヘ 持テちチ 一ヒト のノ
シテ 扇アヒのノ 内ウチよりリ 秋アキ へヘ 出デだダ せセ ばバ 子コりリ
 手テ したシ たタ そソ かカ れレ にニ ぼボ のノ ぼボ のノ 見ミ れレ ばバ
ユフ 秋アキのノ 花ハナをヲ 描エきキ たタ るル 扇アヒ なナ りリ 一ヒト のノ
ト 上ウのノ 紙シ 燈トウ 召メしシ てテ 一ヒト のノ 秋アキ へヘ つツるル
ト 扇アヒのノ 後ノチ せセ よヨ 互タガヒにニ 知チ れレ ぞゾ とト 知チ らラ れレ
ト 白シラ雪ユキのノ 扇アヒのノ つツまマのノ 形カタ 見ミ こコ そソ 妹イモ 脊セ

つなりの情がれ妹脊のなりの情
なれ。

鶴飼 概説

内一卷ノ五

安房國清澄寺の僧甲州石和里にて宿を貸すもの無きま、河原の御堂にて一夜を明さんとしたるに鶴遣の老人松明を灯して来れり。僧は曾て此河下にて同様のなる鶴遣に會ひ殺生の罪深きを説き、處宿を貸し與へたる事を語りしに、老人は其鶴遣は既に命を失ひ、我こそ其幽霊よと明して、懺悔の爲め鶴遣み様を見せて失せたるより、僧は法華經の文字を一字づつ、石に書き付け、川へ投げて後世を弔ひぬ。斯くて夜更し頃、閻魔王現はれ、鶴遣を極樂へ送る事法華經の功力なりと稱へて失せけり。

前ハおほむね開カニ後ハ半強ク謠フベシ
 小書 真如ノ月 空ノ働

後シテ 關 魔王	前シテ 鶴 飼	ワキツレ 從 僧	ワ キ 僧	役 別
面小癩見 唐冠 赤頭 金地鉢卷 着附厚板 狩衣 半切 縫紋腰帶 襟縁色紺敷 修羅扇持	面笑尉(浅倉尉ニ) 尉髪 着附無地尉半目 水衣 緞子腰帶 腰蓑 襟浅黄 尉扇指シ 松明持	右同前	角筒子 着附無地尉半目 水衣 緞子腰帶 珠敷 扇	装 束 附
目 番 五	曲 柄 五	月 五	季	
級 四	替古煩	和石郡代八東国雙甲	所	

鴉飼 ウカヒ

江波左衛門作

早僧河 岡カニ

引れぬ安房の清澄より出でたる
 僧にてぬ。われまだ甲斐の國を
 ずゆ程よ。この度甲斐の玉行勝と
 志してゆ サシ上 行く サフリ 来いつと白浪の
 安房の清澄より出でたる浦のわた
 り鐘倉山 上 かつれ果てぬる格安 切

鴉飼

やつれ果てぬる核姿拵つる牙なれ
ナラシ
 ば彫ナラシぢられず甲一天候シ長ヨク假寐ナラシの草クサ造ナラシ
 鐘カネをまナラシくらナラシの上ナラシにナラシ安ナラシく都留ツルの郡ナラシ
 の朔ツキ立タテつも日高ヒタカけてナラシ新ニホゆる山道ナラシ
ナラシとナラシとナラシぎナラシて石和イソワはナラシきナラシみナラシけりナラシと
甲ぎナラシて石和イソワはナラシきナラシみナラシけりナラシ
ナラシ鴉カラス舟フネにももナラシすナラシ無火ムカのナラシ夜ヨのナラシ音路ネロをナラシ
シテ射上サラリ
一セイ
ツヨク
ナラシ

如ナラシくナラシ心ナラシをナラシけナラシるナラシ中ナラシとナラシ憂ナラシと
 思ナラシはナラシ拵ナラシつナラシべナラシきナラシそのナラシ心ナラシ更ナラシにナラシ夏ナラシ川ナラシに
 鴉カラス使ナラシみナラシ事ナラシのナラシ面ナラシ白ナラシさナラシてナラシ救ナラシ生ナラシとナラシすナラシはナラシか
ナラシわナラシさナラシまナラシしナラシ傳ナラシ人ナラシ同ナラシくナラシ遊ナラシ子ナラシ伯陽ハクヤウはナラシ月ナラシおナラシ摺ナラシ
ナラシつナラシてナラシ契ナラシとナラシあナラシしナラシ夫ナラシ婦ナラシ二ナラシつナラシのナラシ星ナラシとナラシなるナラシ今
ナラシのナラシ雲ナラシのナラシ上ナラシ人ナラシもナラシ月ナラシなナラシまナラシしナラシ夜ナラシ半ナラシとナラシこナラシそ
ナラシ悲ナラシみナラシ給ナラシみナラシにナラシあナラシれナラシわナラシらナラシれナラシはナラシはナラシひナラシまナラシかナラシん
ナラシ

見えざる ワキサラク 非^{シテ}御^{オン}牙^ミはあやなる人^{ヒト}きて
 わたりの^{シテ}御^{オン}カニ シテ御^{オン}カニ シテ御^{オン}カニ シテ御^{オン}カニ
 つも月の^{ツキ}神^{カミ}はこの^{コノ}寺^{テラ}堂^{ドウ}に^ニやすらひ
 月^{ツキ}入^イりて^テ鴉^カと^ト使^シひひ ワキサラク 非^{シテ}は^ハ苦^クし
 くらぬ人^{ヒト}きて^テら^ラづ^ズや。見^ミや^ヤせば^ハは^ハ校^{ケン}
 群^{グン}に^ニ年^{ネン}た^タけ^ケ珍^{ジン}ひ^ヒて^テひ^ヒか^カか^カる^ル救^{クウ}生^{セイ}の
 業^{ウヂノ}勿^レ體^{タイ}な^ナく^ク命^ノは^ハれ^レこの^{コノ}業^{ウヂノ}を^ヲ御^{オン}止^トり

あつて。餘^{ヨリ}の^ノ業^{ウヂノ}にて^テ牙^シ命^ノと^ト御^{オン}擊^ツぎ
 ひ^ヒか^カ シテ前^{マエ}ラ^ラケ モトモ シテ前^{マエ}ラ^ラケ モトモ シテ前^{マエ}ラ^ラケ モトモ
 この^{コノ}業^{ウヂノ}にて^テ牙^シ命^ノと^ト校^{ケン}かり^リひ^ヒ神^{カミ}に
 今^{イマ}更^シ止^トつ^ツべ^ベう^ウも^モな^ナら^ラ ワキサラク 妙^{ヒョウ}妙^{ヒョウ}に
 ナ^ナら^ラこの^{コノ}人^{ヒト}を^ヲ思^シひ^ヒ出^デた^タ事^{コト}
 の^ノこ^コの^ノ二^ニ三^ニが^ガ年^{ネン}前^{マエ}に^ニこの^{コノ}下^カ岩^{イハ}蔵^{ゾウ}と
 ナ^ナす^ス所^トは^ハ雨^{アメ}の^ノら^ラひ^ヒか^カら^ラの^ノ

鴉使ツカヒに行き逢アひひ程シに科カの中ナカの
 教生キョウシヤウの由ユをカしテ入レるハびシもラわ
 思オモひケし我ガが家ヤにつレれて歸キりノ一イチ夜ヤ
 けシぢラずト持モつテ入レるハシシマシテハ
シテ開カニ
 その時トキの御僧ミソウをモてワたりノゆカ ロキツレサテ ロキツレサテ
シテ上ウカシニシマシマシ
 その時トキの僧ソウはテゆカ シテ上ウカシニシマシマシ
ツカヒ
 ころシぢラずト持モつテ入レるハシシマシテ
ロキカツテ
 うれハ何ニ故カ

空カラしくナりテゆカ シテ内ウチノコトラ
 業ノにテ空カラしくナりテゆカ 先カサテリメニ
 方カタ教キョウ語ゴつテ聞キかせテ申マしテゆカへテ歸キをシ
 申マうテ御ミやリゆカへテ心ココロゆカ申マしテゆカ
シテ語ゴ開カニ
 引ヒくモうモこノ石イシ和ワ川カハとシマシすハはシトシ下シメ

三サン里リが間は空しくナりテ教キョウ生シヤウ禁キン断タンの前
先カサテリメニ
 たりノ入レりト申マせル岩イハ落オチ邊ヘに移使ヒは

多^カく^カ使^カな^カよ^カあ^カこの^カ愛^カお^カ悲^カひ^カよ^カつて
 務^カを^カ使^カみ^カ憎^カま^カい^カ者^カの^カ仕^カ業^カか^カな^カ
 か^カれ^カを^カか^カし^カあ^カら^カは^カさ^カん^カと^カ企^カみ^カす^カに^カ
 そ^カれ^カを^カば^カ夢^カに^カも^カ知^カら^カず^カして^カ又^カ或^カ
 夜^カ悲^カひ^カよ^カつて^カ鴉^カを^カ使^カみ^カ悲^カみ^カ人^カを^カば
 つ^カと^カ寄^カり^カ「^カ教^カ多^カ生^カの^カ理^カお^カま^カか^カせ^カが^カれ^カを^カ
 殺^カせ^カし^カら^カひ^カあ^カり^カその^カ時^カた^カた^カの^カ手^カを^カ

合^カせ^カが^カら^カ教^カ生^カ林^カ樹^カの^カ所^カも^カし
 ら^カず^カ向^カ後^カの^カ事^カを^カこ^カそ^カ心^カけ^カら^カば^カけ^カれ
 と^カそ^カ手^カを^カ合^カせ^カ教^カま^カい^カあ^カら^カも^カ助^カか^カる
 人^カも^カ浪^カの^カ底^カに^カふ^カつ^カけ^カみ^カ珍^カ入^カば
 叫^カべ^カど^カ聲^カが^カい^カて^カば^カそ^カそ^カの^カ鴉^カ使^カの^カ
 亡^カ者^カに^カて^カる^カ「^カ苦^カ道^カ樹^カの^カ事^カに^カて^カる^カ
 さ^カら^カば^カ罪^カ障^カ悔^カに^カ業^カ力^カの^カ務^カを^カ

使うて御見せの跡をば懇に弔ひ
 申しのべし 申す方程やぶさらば
 業力の籍と使うて御目にかける
 べし跡と弔うて給はりゆへ
 申す申す 既にこの夜も更け
 くるさうて務使ひ頃にもありかは
 いざ業力の鶺鴒と使はし
申す方程サラリ
申す方程サラリ

○鴉之既律多
 仕舞

他國の物終死したる人の業により
 かく苦みの憂き業を今見る事の
 不思議さよ 濕る松明振り立て
 藤の衣の玉襟 鶺鴒と用きぬり
 申す 鶺鴒巢ねろ 荒鶺鴒も
 申す 此の川彼にはつと教せば面白の
 有根や。底にも見ゆる無火に發く

魚を過しひまはしつづき上げす。ひ
上げ際なく魚を食む時は罪も執も
及の母も忘れはく面白や。張る水の
底ならば生簀の鯉やのぼらん玉鴉
川にあらねども鮎さばしるせら
ぎにがだみて魚はよもたぬ。不思
議やな無火の燃えても影の暗く

あは思ひおでたり月にありぬる悲
しき又鴉毎の無影消えて闇路に
踏るこの牙のなみ跡惜しさを如
にせん。み跡惜しさを如すにせん。○申間
川願の石を拾ひあげ川願の石
を拾ひあげ妙なる法の御経を
一石に一字書きつけて彼向に沈

ワキ
上奇
○切遣子

め吊はるなどかほうかまざるべき
なごかほうかまざるべき

後三箇魔王
早苗
拍子各六

引れ地獄をまにあらず眼前の境
界悪鬼外に無しそもうも彼の者
翁年の音より江行に漁つてその
罪ぢびたしこれ鐵札教と盡くし
金紙をよごす事もなく空間の底

に隨去罪すべかりと僧一宿の切か引
かれ急ぎ佛前へおくらんこと悪鬼心と

カル上
明カニ

和らげて鴉舟と弘誓の船にあし
法華の書法の助け船毎火も深
ふ景色かな迷の多き深雲も

シテ
明カニ

冥相の凡荒く次りて外星が外も
雲暗れて真如の月や出でぬらん

打上打切

〇平地上ヒラカサリ

有難アリガタシ

有難の御事や。奈落ナラクに沈シヅむ悪人アクジンを。
 佛ブツ前マエに送り給タマひなる。その瑞相ズイソウの
 あらたさま。法華ホフワは利益リキ深フカき故ユ。
 魔道マダウに沈シヅむ群類グンルイを救スグはしために
 ありたり。地上チジョウに有難アリガタシき誓チカ言ゴトかな。
 妙ミウの一字イチジはさて如ニ妙ミウに引ヒキられは
 褒美ホウビの詞コトバめて妙ミウなる法ホウと説セツかれたり。

〇住舞

地チ上ジョウはなまわらシくらんシ引ヒキられシ聖教セイコウの
 都名トナメにて二ニつもツなく三サンつもツなく
 唯一ユイ季キの徳トクによりて奈落ナラクに沈シヅみ
 はてしなくシ難ガタシき悪人アクジンの佛果ブツクワを得エん
 事コトはこの經キョウの力チカラならずや引ヒキられシ
 見ミかれシとシ見ミかれシとシ見ミかれシとシ見ミかれシと
 聞クけシはたシとシ悪人アクジンなりシも。

慈悲の心を先きして僧會を供養
 するならばその結縁に引かれつ
 佛果の授に到るべしげに往來の
 利益こそ他を助くべきかあれ他を
 たすべきかなれ

大正九年一月貳拾日印刷
 同 年一月廿五日發行

訂正著作者 廿四世 觀世元 滋

發行所 檜 常之助

菩提心
 願不辭

444

發行所 檜 大瓜
 印刷所 江川 堂
 東京市神田區錦町二丁目拾番地
 東京市四谷區傳馬町貳丁目

終